

阿賀野川蛇行跡



旧河道



阿賀野川が山地から平野に出た所から下流側に向かって約15kmの区間には、蛇行の跡（旧河道）が数多く残されています。このことから、かつての阿賀野川は流路の移動が激しかったことがわかります。

防災研 水害地形デジタルアーカイブ
「阿賀野川」の一部を改変



かつての十二湯 ①

昭和30(1955)年頃
十二湯と
湯端の田んぼ

十二瀉と新江用水路

今から290年前の享保15(1730)年、阿賀野川の水害を軽減するために、松ヶ崎(現松浜)に堀割と堰が造られました。しかし、翌16年の融雪期の洪水により、堰が破壊されて流路が変わり、阿賀野川は直接日本海に注ぐようになりました。これによって、川の幅が広がり河床も低下してしまいました。このため阿賀野川から取水していた新発田藩の岡方組53ヶ村の安田、分田、堀越、京ヶ瀬、岡方では田に水を引くことができなくなり、米を作れなくなりました。そこで岡方組がこれを解決するために幕府に願い出て、用水路の掘削が始まり、享保19(1733)年に完成しました。

こうしてできた新江用水路は、三日月形の十二瀉を囲むように流れ、岡方・長浦地区や阿賀野市など約2300haの水田を潤しています。

阿賀野川

十二瀉

新江用水路



昭和37年、灰塚地区の新江用水路で遊ぶ子どもたち

昭和40年代半ばまで、この用水路は人々の身近な水辺となっていました。現在の新江用水路は、阿賀野市小松地内の阿賀野川頭首工から取水され、総延長約30.5kmに及び、その末端は新潟市北区新崎地区にあります。春には、上流部の水路沿い約4.6kmにわたってソメイヨシノ550本が咲き誇る景色は見事です。



新江用水路沿いに咲く桜



阿賀野川

十二潟と昔の暮らし



お話
倉島 穰^{ゆたか}さん
(昭和 20 年生)

倉島 穰さんと奥様

子どものころの遊び

十二潟のことは、昔は「古阿賀」、「前の川」と呼んでいたね。昔は冬になると十二潟が全部凍ったんですよ。大人が氷の厚さを見てくれて、「大丈夫だと「遊んでもいいぞー」と言ってくれて子どもたちが遊んだんです。昔はスケートもスキーも自分で作ったよ。スケートは竹を二つに割って、角をけずって穴をあけて体をささえる紐を通した。竹のスケートはよーすべるんだ。昔は雪がたくさん降ったから、スキーは二階の屋根から積もった雪に角度をつけて坂にして滑ったもんだ。

潟の凍ったところに穴をあけて手を突っ込んでみると魚が眠っていてつかめたんだけど、水が冷たいから手が真っ赤になったね。雷魚は逃げていった。大きい魚は力があるんだ。

河童の話は聞かなかったけれど、潟の中に何か所か水が湧いているところがあって、そこは気をつけると言われた。湧いている場所はわかりにくかったけれど、冬に水面が凍らないところがあったので、それでわかった。今では水が湧いているところはないんじゃないかなあ。



十二潟の生きものたち

春、阿賀野川の水位が上がると、十二潟に川の水が入ってくる。すると綺麗な水と一緒にたくさん魚が入ってきたね。子どもはヤスを持って捕りに行った。イトヨとウナギも潟に上がってきた。ナマズも美味しかったね。潟とつながった細い水路や田の中にはドジョウがいた。ドジョウ屋が日を決めて買いに来ただけけれど、かなり良い値段で買ってくれるので驚いたね。雷魚は味噌漬けにして弁当のおかずにしたよ。雷魚は見た目が魚というよりまるで蛇のようで恐れて食べない人もいたよ。

大人になってから十二潟のバンやカモをとって食べたこともある。バンという鳥はあまり飛ばず、いつもマコモの中にいたんだ。赤ガエルや食用蛙も食べたな。十二集落には三種類の蛇がいた。シマヘビ、アオダイショウ、ヤマカガシ。捕まえると屋根の上で干して、輪切りにして焼いて塩をして食べたよ。端午の節供の時に菖蒲湯に入らないと蛇になめられるといわれたね。

4月17日には西蓮寺でガニお講（蟹お講）があった。寺には、数十年前まで境内でカニを売る店がたくさんきっていた。他にもおもちゃ屋などの露店も出て周辺の人々も集まり大変な賑わいだったよ。



水神様

このあたりの水は鉄分が多くてカナクッセ（金臭い）まずい水だった。小学校の脇の水路の水を汲んでリヤカーで運んできたりした。その水は安田から流れてくる水で、きれいで美味しかった。冬の寒い日に手押しポンプのところに小さい棚を作って、八頭（里芋の母芋）と小豆^{あずき}を塩味にゆでたものを供えて、「水神様水神様」と唱えた。地下水は大切で、ポンプにはコップに入れた水と塩を供えるなど神棚と同じ扱いをした。昭和35年に水道が通ったのでポンプは埋めてしまった。

蟹 御 講

西蓮寺は真宗大谷派の寺院。石川県白山比咩神社の神職から僧侶となった兼智が富山県に創立しましたが、火災によって焼失したため寛永元（1624）年にこの平林に再興されました。

西蓮寺では昔、4月17日に「蟹御講」という行事が行われていました。「寺御講」ともいって、本堂で読経し、法話を聞く行事でした。境内には四十軒ほどの露店が並び、大変な賑わいだったと言います。中でも蟹を売る露店が名物でした。松ヶ崎浜・福島潟・新井郷川、後に落堀川でとれた、茹でて湯気がホカホカとあがる蟹をトラックで運んできたそうです。齋藤泰住職に伺ったところ、「蟹御講」には二つの伝説があるそうです。

一つは4月17日に十二潟に巨大な蟹が上がったということから。もう一つは十二潟が「魔の淵」と呼ばれていた頃、五左工門という者が享保3（1718）年に怪物と出会った話です。西蓮寺を阿賀野川に流そうと企むほどの悪人五左工門は（「蟹御講と旧河道」参照）漁業の権利もないのに十二潟に網を入れたところ、網の中に大きな笠のような物体が入っているのを見て「怪物が入った」と大変驚き恐れしました。そして名主宅へ行って禁を犯したことをお詫びし、西蓮寺住職には教えさとされて西蓮寺の信者となって、村の人たちと共に怪物を魔の淵に放してやり、自分が主催者となって今まで捕らえた蟹（怪物は蟹だった）と魚類のために西蓮寺で大供養を開催しました。それが4月17日だったのです。

そんな伝説のある「蟹御講」でしたが、寺での法要がなくなり、蟹の露店も昭和50年代にはなくなりました。今は綿飴屋さんが一軒出ているだけになりました。



画：高橋 郁丸

かつての十二潟 ②

写真右▶

昭和33(1958)年 中池の橋



かつての十二潟 ③

写真左◀

昭和37(1963)年 新江用水路



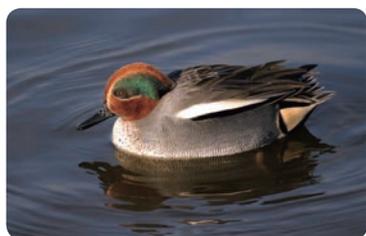
十二瀨の生きもの (鳥類)

十二瀨は、水際にヨシやマコモ、浅い止水域には、ヒシやアサザが生育する豊かな自然がコンパクトに残されていますが、自然堤防上には人家や道路があり人との関わりが大きいことも特徴の一つです。野鳥は、水辺に特徴的な多くの種が一年の間に観察できます。冬には、すぐ近くの阿賀野川の中州に三千羽を超えるコハクチョウや希少なガン類が見られます。



カルガモ

ひなが親鳥について行進する姿で有名。クチバシの先端が目印。



コガモ

小形のカモ。オスは華やかで「ピリッ、ピリッ」と鳴く。メスは地味な羽色。



アオサギ

サギの中でも最も大きく、灰色の羽。小魚やカエル、ザリガニなどを食べる。



ヨシゴイ

夏鳥。ヨシ原に巣をつくる黄褐色のサギで、首を伸ばし擬態することもある。



バン

夏鳥。全体に黒みがありクチバシの先端が黄色で額にかけて赤く目立つ。



オオバン

ツルの仲間で真っ黒な体に真っ白なクチバシとおでこが特徴。



オオヨシキリ

夏鳥で「ギョギョシー」と鳴きヨシ原でなわばりを主張。ウグイスの仲間。



キジ

日本の国鳥。地面を歩いてエサをとり、「ケーン、ケッケー」と鳴く。



ノスリ

ずんぐりしたタカ。カエル、ヘビや鳥を低空飛翔し、ねらいをつけて捕らえる。



シジュウカラ

野にも町にも住み、人家の庭にもやってくるポピュラーな鳥。

十二瀉の生きもの(植物)



アサザ

県の絶滅危惧Ⅱ類に指定の貴重な植物で、十二瀉では県内最大の群落をつくる。夏には黄色の花が水面を埋めつくすほど見られる。



ガガブタ

アサザと同じミツガシワ科の多年草で、県の絶滅危惧Ⅱ類に指定されている。8～9月頃に小さくて白い花を咲かせる。



コウホネ

6～9月頃に黄色い花を咲かせる。大きな葉が特徴。



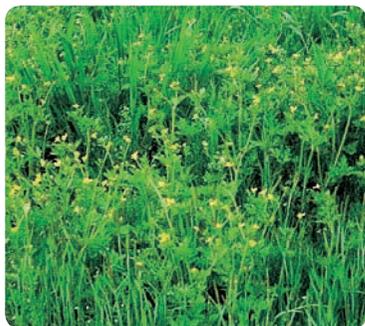
ヒシ

水面に葉を広げる1年草。ひし形はこの植物の葉や種子が由来となっている。



イチヨウウキゴケ

水面に浮かぶゴケ類。イチヨウに似た形をしている。



ケツネノボタン

田んぼのあぜなどによく見られる。春～初夏に開花する。



ヨシ

水辺に生える多年草。野鳥や小魚などの良い生息場所となる。



チクゴズズメノヒエ

外来種で、岸から水面にマット状に広がるので他の植物が追いやられる。

十二瀧の生きもの(魚類)

十二瀧が阿賀野川の本流だったころは様々な動物たちが暮らし、日本海からサケやサクラマス、イトヨなどの回遊魚もさかのぼってきました。現在では越後平野のほかの瀧と同じく、川や海との行き来ができなくなってしまいました。生息する種類は少なくなりましたが、十数種類の魚類やカメ類、モズガニなどの水生動物、トンボ類が生息し、水辺には様々な鳥類やほ乳類もやってきます。

掲載種のグループ分け

魚類

両生類

は虫類

ほ乳類

甲殻類

貝類

昆虫類

その他



コイ

生活力旺盛で、成長すると全長が80cmを越える。県内で飼育、放流されているのは外来種。



ギンブナ

マブナとも呼ばれ、放流もされている。コイに似るが、ひげがない。ほとんどがメス。



タイリクバラタナゴ

アジア大陸原産。横から見ると菱形で、オスの婚姻色は鮮やか。二枚貝に産卵する。



モツゴ

全長は最大7~8cmほど。口先がとがってやや上向き。西日本からの移入種。



タモロコ

モツゴに似るが、口先は丸みを帯びてひげがあり、尾のつけ根に黒い斑点がある。



ツチフキ

水底で暮らし、砂泥中の小動物を食べている。西日本からの移入種で、平野部で増加。



ナマズ

2対のひげをもち、全長60cm以上に成長。魚やカエルなどを捕食。古い時代の移入種。



キタノメダカ

水面を群れをなして泳ぎ、小昆虫やミジンコなどを食べる。環境省絶滅危惧Ⅱ類。



カムルチー

別名ライギョ。肉食性で、全長1mに達する。朝鮮半島、中国から食用に持ち込まれた。

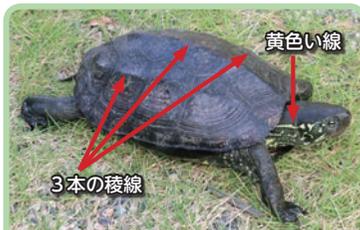
十二漁の生きもの (その他)



大きな鼓膜のオス

ウシガエル

体長18cmに達する大型のカエル。別名食用ガエル。北アメリカ原産の特定外来生物。



黄色い線

3本の稜線

クサガメ

首に黄色線、背甲に3本の稜線がある。越後平野に多数生息するが朝鮮半島、中国原産。



赤褐色の斑紋

ミシシippアカミミガメ

目の後方に赤褐色の斑紋がある。北アメリカ原産の問題ある緊急対策外来種。



尾に縞模様はない

ホンドタヌキ

里山から人里まで生息。環境適応能力が高く、動物質や植物質など何でも餌とする。



ホンドイタチ

水辺に暮らし、カエルやネズミなどの小動物、水中の魚などを捕らえて食べる。



体が赤いオス

アメリカザリガニ

5対の脚をもち、第一脚は強大なはさみ状。ウシガエルの餌として持ち込まれた。



毛密生

甲幅最大8cm

モクズガニ

大型のカニで、はさみに毛が密生。カワガニとも呼ばれ、海で生まれ川に上って成長。



翼

幼貝

カラスガイ

殻の長さ30cmを越す大型の二枚貝。幼貝には翼(よく)が発達する。生息数は減少中。



ショウジョウトンボ

水草が繁る平地の池に生息する。成熟したオスは、全身が真っ赤に変わる。



若いオスは黄白色

コシアキトンボ

水草が繁茂する平地の池に生息。オスは腹部の前方が抜けているように白い。



チョウトンボ

ほぼ全身が黒色で後ろ翅が幅広く、チョウのようにひらひら飛ぶ。平野部の池沼に生息。



拡大

オオマリコケムシ

直径数十cmになる寒天質の大きな塊。1.5mmほどの個虫が多数集まって群体を形成。



岡方第一小学校の取組

平成 24 年度に「未来に残そう地域の宝十二潟」というテーマで、6 年生が学習を始めました。岡方コミュニティ委員会、県立植物園園長、北区役所区民生活課など多くの方々のご支援を受け、観察会や外来種駆除など貴重な体験や豊かな交流が行われ、活動の様子は、新聞やテレビで紹介されました。また、「全国川サミット」や「潟シンポジウム」で発表し、地域外に広く知っていただく機会も得ることができました。そして、地域の一員として、貴重な自然と歴史を引き継いでいく子どもたちを育もうと、平成 30 年度より、全学年で十二潟の学習を行っています。「いろいろ十二潟を守る会」を中心とした手厚いサポートにより年々、学習の幅が広がっています。



NPO 法人いろいろ十二潟を守る会

十二潟は、地元では「古阿賀」と呼ばれ、魚釣りや農業用水にも利用され親しまれています。平成 19 年度、20 年度に実施した植生生物調査の結果、アサザ、ガガブタの絶滅危惧種の群生をはじめ、動植物 161 種が確認され、潟固有の貴重な生態が残っていることが分かり、岡方地区コミュニティ委員会の環境部会や岡方第一小学校の子どもたちと一緒に保全活動を続けています。

十二潟を次世代に残すために、平成 29 年度に「NPO 法人いろいろ十二潟を守る会」を立ち上げ、埋め立てが進む民有地の土地を各方面の皆様のご支援を頂き取得させていただきました。

このガイドブックを機会に、十二潟の成り立ちや周辺の歴史に興味をもち保全活動へのご理解を頂ければ幸いです。

NPO 法人
いろいろ十二潟を守る会
理事長 山崎 敬雄

